

極上の一夜から始まるCEOの 執着愛からは、逃げきれない

季邑えり

Eri Kimura

目次

極上の一夜から始まるCEOの

執着愛からは、逃げきれない

書き下ろし番外編

とこなつ

常夏の島で

極上の一夜から始まるCEOの

執着愛からは、逃げきれない

◇プロローグ

「ここかなあ」

麻生玲奈は草履を履いた足を止めると、目の前の建物を見上げた。京都の街の中心部、四条河原町に近いところにある昔ながらの京町屋。

「檜屋」という屋号だけの看板があるにはあるけれど、小さすぎて見逃すところだった。ここが勝堂会長が予約してくれた料亭で間違いないだろう。

シンガポールでスリから守ったことで知り合った会長は、白の混じる髪でありながらもとても洗練とした方だ。

その時のお礼をしたいと言われ、行きたい店を聞かれて口から出たのがこの檜屋。玲奈が勇気を出して町屋の引き戸を開けると、カラカラと戸の滑る音がする。

「すみません」

狭い間口の奥に入り、屋号だけ染抜きされた暖簾を潜ると凝った数寄屋造の空間が広がっている。柿色の着物を着た仲居を見るに、どうやらここであっているようだ。

楽しみにしていた料亭にようやくたどり着いて、ホッと胸を撫で下ろした。

「麻生様、よお、おこしやす」

玄関に飾られた秋菊が目に入ってくる。秋を代表する白い花卉が可愛らしく、緊張している玲奈の心をふわりと和らげた。

紅葉の季節の京都であれば、きっと似合うと思って選んだ白地の訪問着の裾を少し上げて、上がり框の段差でつまずかないように慎重に草履を脱ぐ。

なんといっても、今日は憧れの「檜屋」での食事会。

柔らかな栗色のショートボブの髪も朝早くから整え、べつ甲の櫛をさしてある。

黒く大きいくりっとした目にかかる長いまつ毛、雪のように白い肌にぷっくりと膨らんだ唇と、玲奈は一見すると可愛らしい外見をしている。

お淑やかで、大人しい——というのが大抵の人が抱く玲奈の第一印象だ。

けれど、大学を卒業してから働き始めて三年目。

既にルライターとして独立している玲奈は仕事中毒気味の女子だった。ライターという仕事柄、自分から進んで取材する必要がある。

見た目に反して、玲奈はなかなか積極的な性格をしていた。特に夏の初め頃に彼氏と別れてからは、休日もこうして取材の下準備をしている。

——やっぱり檜屋にしてよかった。ここって、なかなか入れないのよね。本当は記事

にして、たくさんの人に紹介したいけど……

檉屋は一見さんお断りの料亭のため、紹介がなければ入れない。

今日はプライベートなので取材はできないけれど、ルポライターの端くれとしてはこの機会を逃したくなかった。

玲奈は山間の奥まったところで生まれ、閉鎖的な地域で育っている。小さな頃は町の図書館で旅行記を読んで、その場所に行った気分になるのが大好きな女の子だった。

だから自分が経験したことを書いて、それを読んだ多くの人に疑似体験してほしい。そんな思いでルポライターを目指してきた。

いつか檉屋のような料亭も記事にしたい。しかし写真を撮ることはマナー違反になるから、できる限り記憶に残すために、玲奈は注意深く料亭を観察した。

「足元、気をつけておくれやす」

「はい、ありがとうございます」

料亭の仲居が先だつて案内してくれた。廊下に面した庭はもみじが朱と黄に色づいて、秋の風情を楽しめる。

どこかでカコン、と鹿威しが鳴る音が聞こえてきた。

「麻生様にご到着しましたえ」

仲居が障子を開けると、清涼とした青畳の香りがする。

十二畳を超える部屋には木目の美しい大きな座卓があり、床の間には水墨画の掛け軸と、ススキやリンドウを使った生け花が飾られていた。

そして座椅子の一つに若くて姿のいい男性が座っている。

彼は体形に合わせて作られた仕立てのいい三つ揃えのスーツを着て、胡坐をかくでもなく、きちんと正座をして待っていた。その涼やかな佇まいに空気がぴんと張りつめる。

——わっ、凄くカッコいい人！

勝堂会長からは息子さんが一緒だと聞いていたけれど、こんなにも美麗な男性だとは思っていなかった。座つていても背が高く、細身だけれど体格のいいことが一目でわかる。黒髪をきつちりと後ろに撫でつけ、さっと見ただけでも整った顔からは誠実そうな人柄が伺えた。

胸がときめきそうになるけれど、相手はなんといつても勝堂ホールディングスのCEO。

失礼のないようにと思いつながら身を滑らせるようにして部屋に入る。

「お待ちせしました」

「いや、こちらも今到着したところです」

緊張で声を震わせて挨拶をすると、どこかで聞き覚えのある低い声が耳に届く。

——んん？ あれ？ ……この声、どこかで聞いたことがある？

まさか、と思いつつも仲居に座椅子を引いてもらい、着物の裾をはらいながら座る。そして顔を上げると正面にいる男性の顔をまっすぐ見た。

その瞬間。玲奈の息が止まった。

彼の顔を真正面から見て、呼吸することも忘れてしまうほどの衝撃に襲われる。

低い声と精悍な顔つき、凛々しい目元に上品そうできて黒豹のように隙のない彼は、封じ込めていた記憶の中の男にピッタリと当てはまる。

着ている服も髪型も、あの日とはずいぶん違うけれど、彼そのものだ。

「もしかして……!!」

「こんにちは、ご無沙汰しています」

「まさか!」

「よかった、お元気そうですね」

「テツさん?」

玲奈が彼の名前を叫んだ瞬間に、鹿威しがカポーンと音を響かせた。

男性は口元で弧を描くように微笑み、玲奈を見つめる目を猫のように細めている。

一方、玲奈の顔からは血の気が引いてすうっと青くなる。彼は以前ニューヨークで出会ったテツだった。

玲奈が記憶から葬り去った、黒歴史でもある『ワンナイト』しちゃった男がそこにいた。

◇第一章

彼との出会いは四カ月前にさかのぼる。

玲奈は取材のためにニューヨークに来ていた。以前、英語を学ぶ目的で滞在した街から土地勘もあって取材も捗り、いい記事が書けそうだった。

最後に訪れたショップの写真を撮り、ホテルに帰って文字にしようとノートパソコンを開く。

メールチェックをしていると、ある女性誌のデジタル版の記事が気になった。雑誌を開くとそこには思いもしない内容が綴られている。

先輩ライターであり、恋人の館内連の名入り記事が雑誌に掲載されていた。だが、その記事を書いたのは玲奈だった。

「うそっ、なにこれ?」

何度見直しても自分の文章が使われている。日本全国のパワースポットと呼ばれるエリアを巡って書いた渾身の記事だ。

修行僧しか行かないような滝壺で滝に打たれたことまで詳細に書かれている。でも、

館内はその滝に行ったことなんてないはずだ。

「どういうこと？」

見開き六ページも使った記事は、どう考えても玲奈の撮った写真と文章からなっている。

——もしかして、もしかすると盗まれた？

館内は、初めて就職した出版会社の先輩だ。

新人の指導を任された館内によって、右も左もわからなかった玲奈は水を吸収するスポンジのように仕事のコツを掴んでいった。

新入社員の中では抜群に可愛い玲奈を狙った館内が、彼女を恋人にするのに時間はかからなかった。

玲奈が仕事に慣れてきて、もっと自由に取材がしたいと独立してしばらくたったある日、館内は玲奈に言った。

「玲奈、その取材ノートと記事の下書き、見せてみるよ。俺がチェックしてやる」

玲奈は何も疑わずにデータを館内に送信した。

あの時の記事だ。

咄嗟にスマートフォンを持ち、アプリを立ち上げて館内に電話をかける。いつもならすぐに出るはずが、いつまでたっても返答がない。

連絡が欲しいとメッセージを打つと、即座に既読になる。でも、返信はない。

——えっ、私、もしかして無視されているの？

信じられない思いで画面を見ていると、ぴよこんと可愛らしいスタンプでメッセージが届いた。

『ごめん』

手を合わせて頭を下げるスタンプを見て、玲奈はそれまでであった驚きを怒りに変換した。

スマートフォンを持つ手がふるふると震えてしまう。

——あの男！ 私の記事を盗ったのね！

スタンプを見る限り、館内はわかかっていてやったに違いない。

玲奈の電話に出ないのは後ろめたく思っているからだろう。思えば、彼はいつでも都合が悪くなると逃げる男だった。

燃えるような怒りと共に、胸の奥がツキンと痛む。

館内は一見すると粗暴な感じで、いかにもフリーライターらしい野性味のある男性だ。それなのに、困っていた玲奈を助ける優しいところに惹かれていた。

——けど、もう無理だ。

頬を伝う涙が手にしていたスマートフォンの画面の上にポツリと落ちる。まさか、こ

んな風に裏切られるとは思いませんでした。

——彼氏に騙されたなんて……どうしよう。

記事を書かせた出版社に問い合わせようかと考えたが、ニューヨークとは時差がある。それにライターとしてのキャリアは館内の方が圧倒的に上だ。この雑誌の編集部とも付き合いが長いと言っていた。

今から玲奈が「この記事を書いたのは自分だ」と主張しても、出版社の担当が玲奈を信用するとは思えない。

むしろ、言いがかりをつけるライターだと悪印象を持たれ、自分自身の首を絞めることになりかねない。

どうにもできない現状に悔し涙が落ちていく。

——あんな、あんなクズ男を好きだったなんて……

自分がどうしようもなく情けない。書いたものを丸ごと渡してしまった落ち度もある。これは手痛い手切れ金でしょう……そう思いたくてもすぐに忘れられない。

今はもう、悔しさと悲しさで胸が張り裂けそうになって——玲奈は柔らかなベッドに顔を突っ伏した。

ひとしきり泣いた玲奈は、気持ちを切り替えようとブルックリン橋まで足を延ばすこ

とにした。

対岸に見える高層ビル群を眺めながら歩いていると、自分の悩みがちっばけなものに思えてくる。空色のワンピースを着て、小さなかばんだけを持って橋の上を歩いていた。

——シヨックだけど、早く気持ちを切り替えなくちゃ……

恋人を失ったことより、記事を盗まれたことの方が痛い。

それだけ館内への気持ちは冷めていたのだろう、玲奈は茫然と大都会の景色を眺めていた。

——はあ。辛い時とか、落ち込んでいる時って、景色が心に染みるのよね……

本当なら、山とか海とか大自然を見たかったけれど、ここはニューヨーク。

人工物の高層ビル群も、これだけ揃っていると圧巻だ。いつか、あのビルの中の一画に自分のデスクを持って働きたい。

そんな無謀とも言える野心があるものの、今の玲奈にはそれこそ夢物語のように思えてしまう。

彼氏に騙されたちっばけな自分は、ここからどうやって立ち直れるのだろうか。

考え事をしながらふらふらと歩いていると、突然、後方から男性の声が出た。

『あつ、危ない！』

すぐ近くで聞こえた声に、ビクッと身体が強張る。

男性は玲奈の腕を掴むと、サッと端の方に引き寄せた。その玲奈の横を、もの凄い勢いで自転車走って行く。

男性が腕を引いてくれなかったら、危うくぶつかるところだった。ぞくぞくと恐ろしさが背筋を駆け抜け、思わず呟いてしまう。

「びっくりしたあ……」

ボーツと景色を見すぎていた。

ブルックリン橋は歩行者と自転車用の通路があるけど、時折スピードを出した自転車が通り過ぎていくから、歩く時は気をつけるようにとガイドブックに書かれていた。

けれど、そんなことはすっぱりと頭の中から抜け落ちていた。

玲奈はなかなか収まらない動悸に動揺しつつも、腕を引いてくれた男性にお礼を言わなくては、と顔を上げた。

見上げるほどに背の高い男性は、ジョギング用のサングラスをかけ青いスポーツウェアを着ている。

いかにも走るための服装をした彼は、切り揃えられた黒髪に整った鼻梁びりょうをしていて、アジア人らしき肌はとても滑らかだ。

男らしい広い肩幅に長い手足。細身に見えて、半袖から出ている腕にはびっちり筋肉がついている。サングラスをとって胸のポケットにひっかけると、形のよい眉に黒曜

石のような瞳が射るように玲奈を見つめた。

——えっ、ちよっと凄いいケメンが目の中にいる……

仕事でインタビューをする相手は、その業界の中でも超一流と言われる人が多い。目の前の彼はこれまで出会ってきた極上の男性陣と比べても群を抜いてカッコいい。

イケメン、なんて言葉では収まらない。なかなかお目にかかれなレベルの美丈夫だ。思わず言葉を失いそうになったけれど、助けてもらったお礼を伝えないと。

玲奈は風で揺れるスカートを押さえながら男性の方に向き直った。すると、玲奈が口を開く前に優しく声をかけられる。

『大丈夫？』

『はい。ありがとうございます。助かりました』

どうやらジョギング中だったらしい彼は、立ち止まったまま息を落ち着かせるように呼吸している。しばらく玲奈を見つめていた彼は、少し迷うような仕草をした後で尋ねてきた。

「君、もしかして日本人？」

「は、はいっ」

突然流暢な日本語で話しかけられ、目を丸くする。

てっきり外国人だと思っていた男性は、玲奈と同じ日本人のようだ。彼は心配そうに

顔を覗き込みながら再び話しかけた。

「どこかぶつかった？ 避けたつもりだったけど」

「いえ、どこも痛くありません、大丈夫です」

「でも、君、涙が」

ハッとして手を^{まぐり}瞼に当てると、確かに涙が流れている。気がつかないうちにまた泣いていた。

困ったように眉根を寄せて玲奈を見つめる男性はタオルを取り出しただけで、自分の汗を拭いているものを差し出すのに躊躇^{ためら}っている。

「ご、ごめん。これしかないけど、汗臭いよね」

「あの、大丈夫です。ハンカチなら持っています」

ゴソゴソとかばんを開けてハンカチを取り出すと、目元を押さえ涙を拭きとる。

簡単に泣いてしまうなんて、こんなにも自分は弱かったのかと思うと再び涙が溢れてきた。

「大丈夫？ やっぱり痛かった？」

「い、いえ、違うんです」

涙を止めないといけないのに、優しい日本語を聞くと不思議と心が緩んでいく。

「ごめんなさい」と言いつつも顔にハンカチを当てた玲奈を、男性は歩道の端へと誘導

した。

泣きやむことのできない玲奈の前に立ち、まるで慈しむように静かに見守っている。

——どうしよう、ちょっとしか話していない人の前で、こんなにも泣いてしまうなんて。それでも彼が目の前に立ってくれたお陰で、玲奈の泣く姿は周囲の視線から遮^{かざ}られていた。動揺しながらも彼の行動がありがたかった。

溢れてくる悲しい思いのままにひとしきり涙を流し終えると、玲奈は目元をハンカチで押さえながら男性を見上げた。

「ご心配をおかけしました。ちょっと個人的にいろいろあって、涙が出ただけなんです。ぶつかったとか、驚いたとかではありません」

落ち着きを取り戻したところで、玲奈は男性に向かってペコリと頭を下げた。

「落ち着いたなら、よかった。ここは風に乗って自転車が凄い勢いで走ってくることもあるから、気をつけて」

「はい、ありがとうございます」

顔を上げて男性を見ると、まだ何か言いたいような顔をして玲奈を見つめている。顔に何かついているのだろうか、と思うほどだけれど、不思議と嫌な感じがしない。

「あの、何か……」

目の前で泣いてしまった申し訳なさもあり、玲奈は男性の前から動くことができない

かった。すると、彼が思わぬことを口にする。

「君、よかったらその、あっと、僕でよかったら話を聞こうか？」

「えっ」

「いや、いきなり泣いてしまうなんて、よっぽど辛いことがあったのかな、と思うんだけど……」

キョトンとした玲奈を見て、男性はあたふたしながら頭をかきつつ説明した。

「ほら、壁だと思ってくればいいよ。辛いことって、誰かに聞いてもらおうとスツキリすることがあるし、僕なら日本語で会話できるし」

そこまで言われると、ちょっと話してみようかなと思わなくもない。

男性はとても誠実そうに見えるし、なんの関係もない人だからこそ、悔しいことでも話せるような気がした。

—— 優しいそんな人だし、一緒に話すくらいならいいかなあ……

きつと東京で同じことを言われたら、そういう気持ちにはならなかっただろう。

でも、ここはニューヨーク。日本人で、週末にブルックリン橋でジョギングをする余裕のある成人男性とはどんな人なのか、ライターとしても関心が出てくる。

旅先の気軽さが、玲奈の気持ちを大きくさせていた。

「その……いいんですか？」

「ブルックリン橋を渡り切った先にピザショップがある。せっかくだから、そこまで歩こうか」

それでもフルネームを名乗る気にはなれなくて、「レナと呼んでください」と言うのと、「じゃ、僕のことはテツでいいよ」と気軽な感じで話し始めた。

心地よい風を受けながら、玲奈は自分がライターであることと、記事を盗まれたことを簡単に説明する。

「へえ、その男はずいぶんと酷いことをしたね」

「そうなんです。私の努力と時間を奪われたことが、凄く悔しくて」

「君さえよければ、腕利きの弁護士を紹介するよ？」

「いえ、こういう業界って狭いから、下手に騒ぐと私の方がダメージ受けちゃう可能性があつて。一番いいのは、仕事できちんと見返していくことなんです」

「そっか、レナさんは偉いね」

ただ並んで歩くのも心地よかった。これが面と向かつての会話だったら、適当なところで切り上げていただろう。

ゆっくりと歩く玲奈の歩幅に合わせてくれる気遣いも嬉しい。

—— 不思議な感じ。初めて会ったのに、こんなにも気安く話してしまうなんて……

か弱く見られるのが嫌で、女の涙を使うのは卑怯だからと人前では泣かないようにし

ている。

それなのに彼の雰囲気がそうさせるのか、テツの前では気負うことなく泣いてしまい、自然体でいられた。

——こんなこと、初めてかも。

気がついたら、騙した相手が信頼していた彼氏であることも喋っていた。新卒時から世話になっていたけれど、恋人だった期間もどこか利用されている感じがしたことも。

「なんであんな男に惹かれちゃったのかなあ」

「それはレナさんが仕事に真面目に向き合っていたからだよ。師匠みたいな存在なら恋をしていると錯覚しても、おかしくないよね」

「……そう、です」

ほんの少し前に出会ったばかりなのに、まるで玲奈の全てを受け入れてくれるようだ。トクリと胸が高鳴るけれど、旅先で会った人に惹かれても未来はない。

頭を左右に小さく振り、玲奈は話題を仕事の話に切り替えた。

これまで取材に行った国の話で盛り上がると、テツは玲奈にどうしてライターという職業を選んだのかと聞いてきた。

「小さな頃は、町にある図書館にこもって旅行雑誌とか、旅行記を読んでいたんです。それで、いつか自分も旅をして書いてみたいなって」

「へえ、小さな頃からライターになったかったんだね」

「小学校の卒業文集に、もう『将来はルポライターになって世界中を巡りたい』と書いていたくらいです。凄い田舎だったから、外の世界にあこがれていたのかな」

「偉いね、こうして夢を叶えて頑張っているのだから」

夢を叶えたと言われるとそうだけど、あまり実感はない。

がむしやらに勉強して、仕事をして、気がついたらニューヨークにいる。

けれど、クズ男にひっかかり騙されたばかりだから、褒められるとなんだか余計に惨めな気持ちになってしまう。

思わず俯いたところで、「レナさん、大丈夫？」と低い声が降ってきた。

「は、はい。大丈夫です」

顎を上げて彼を見上げると、太陽の光が顔にかかり一瞬眩しくなる。

陰になっても美しい眼差しが、玲奈の見えない心の壁を撃ち抜いていた。

二人でのんびりと歩き続けてしばらくすると、橋のたもとにあるピザショップにたどり着く。

店の前には長い行列ができていた。待とうかどうしようかと一瞬迷うけれど、できればもう少し彼と一緒にいたい。

玲奈がチラッと上目遣いになってテツを見上げると、切れ長の綺麗な目と視線が重なる。彼は形のよい口元で弧を描いて微笑んでいた。

「ちょっと待つみたいだけど、大丈夫？」

「テツさんの方こそ、ジョギングの途中だったのに、いいんですか？」

「今日はオフだし、レナさんの話もう少し聞きたい。まだ、喋り足りないのでは？」
玲奈を気負わせなためか、テツは目元を柔らかに笑った。

——あ、素敵。

彼の優しく誠実な態度が玲奈の心の壁を溶かしてくれる。容姿だけではない、内面から溢れ出る人のよさが心地いい。

さつきとは比べ物にならないほど、心臓の鼓動がうるさいくらいに鳴っている。

テツと一緒に行列に並んで待つ時間は、少しも苦にならなかった。

彼の低音で心地よく響く声を、このままずっと聞いていたい。そんな風に思ったところで、ようやく店内に入ることができた。

白い壁にはモダンな絵がかけられ、木目調の二人掛けのテーブルが置かれている。その上には焼き立てのピザを置くためのスタンドもあり、本格的な店だった。

店内は観光客らしき人たちが賑わっている。

「ここって石炭窯で焼くピザですね。楽しみ！」

「ハーフ・ハーフもあるみたいだよ。二人でミディアムサイズを頼んで、分けて食べようか」

まるで以前からの知り合いのような気安さで、ホールピザをオーダーする。

ディナーには少し早い時間だけど、歩いていたらちようどよくお腹もすいていた。ジンジャーエールを頼むと、二人の前にジョッキグラスになみなみと注がれたものが届けられる。

炭酸も強く、生姜しょうがの匂いがしっかりあった。

「わあ、本格的なジンジャーエール。……飲み切れるかな」

「はは、無理しないで」

たわいないお喋りをしつつも、玲奈はメモ帳を取り出した。

取材ではないけれどメニューや店内の様子など、何かあった時に思い出して書けるようにする。思わず夢中になって書き始めたところで、あっと思い顔を上げた。

「ごめんなさい、私、職業柄なんでもメモしておきたくて」

「レナさんは本当にライターなんだね」

特に機嫌を悪くすることもなく、感心したふうにテツは玲奈を眺めている。

館内は同じライターでありながらも、デート中にメモを取るとプライベート感がなくなるからやめてほしいと言っていた。

テツの年齢を聞いていないけれど、館内と同じくらいに見える。それなのにテツの方
がはるかに包容力があり、大人の男の余裕を感じる。

今も長い脚を組んでイスに腰かける姿は悠然ゆうぜんとしていて、モデルのようにカッコいい。
店内にいる女性たちの視線をなんとなく感じるの、テツの整った容姿のためだろう。
玲奈はメモとペンをかばんの中にしまい込んだ。

「そういえば、テツさんはニューヨークに住んでいるの？」

「いや、今回は出張だよ。ちよつと長かったけどね」

「ジョギングしていたから、ここに住んでいる人なのかなって思っていました」

テツは組んでいた脚をほどいてイスに座り直すと、自分のことを語り始めた。

「僕は今、仕事を引き継ぐ途中でね。ここへは顔つなぎで来たけど、問題が起きて急に
対処する必要があるって……って、まあそんなわけで長期出張中」

「引き継ぎって、上司の方が辞めるとか？」

「そんなところかな。だから把握しないといけないことが多くて、少し参っていた」

「……嫌な仕事なの？」

「そうではないけど、責任のある仕事だから……ちよつと重圧を感じている。でも君の
仕事への情熱を聞いていると、僕も負けられないなって思えてきたよ」

なんの仕事かはわからないけれど、玲奈が想像している以上にテツはエリートなのか

もしれない。

聞いてみたいけど、そうすると一気に仕事モードに入り、今の甘い雰囲気はなくなる
だろう。玲奈は珍しく質問することをやめてしまった。

ウェイターが焼き立てのピザを運んでくる。

トマトとホワイトソースの二つの味が一枚のピザになっていた。白い陶器の皿にのり、
テーブルの上はたちまちチーズの匂いに包まれる。

「わあ、美味しそう！ これ、ハーフ・ハーフだから半分ずつ取り分けて大丈夫ですか？」

「それはいいけど、レナさんはこんなに食べられる？」

「ええ、泣いたらなんかお腹すいてきちゃったみたい」

「はは、だったら僕の方も食べてもいいよ」

「それは流石さすがに遠慮しておきます」

ふふつと笑いながら互いの皿に取り分けると、玲奈はピースを持ち上げてぱくりと口
に入れる。生地は薄めなのに、もちもちとして弾力があった。

トマトソースも酸味と甘味が絡まって、コク深い。

「うん、美味しい！ テツさんもほら、熱いうちに食べるといいですよ」

上機嫌になった玲奈は、遠慮しないで口を開けてピザを食べる。

すると、その様子を見ていたテツが声を殺すようにして笑い始めた。

「あの、何かおかしいことがありましたか？」

「いや、レナさんは素直な人だって」

「そうですか？ 美味しいものを美味しいって言っただけですが」

「うん、それがいいんだよ」

テツは猫のように目を細めて玲奈を見つめていた。そして玲奈の食べっぷりに触発されたのか、彼も思いっきり口を開けてピザを頬張る。

ミディアムサイズのピザは、あつという間に姿を消してしまった。

「ああ、もうお腹いっぱいです」

「それはよかった。案内した甲斐があったよ」

チップ分を上乗せしても五十ドルくらいだから、物価の高いニューヨークでは良心的な値段になる。玲奈も半分出そうとしたけれど、テツは「ここは僕が誘ったから」と言っ

て気がついたら支払いを終えていた。

「次に会う時に、レナさんが何か奢ってくればいいよ」

——次、って。また会いたいって、思ってくれた……

通りすがりに出会っただけなのに、同じ日本人だからと話をし、一緒にピザを食べる。海外旅行先では時折あるけれど、次に会おうと約束しても本当に会うことは意外と少ない。

でも、テツとなら本当に会ってみたい。そう思ったところで彼はズボンのポケットから一枚のカードを取り出した。

「ああ、カードがあった。レナさん、よかったらこの後、ここに飲みにいきませんか？」

そのシヨップカードには、お洒落しゃれそうなバーの案内がのっている。テツの泊まっているホテルに近く、よく足を運んでいるという。

「ソーホー地区ですね、このお店ならわかると思います」

「そう、だったら今夜、どうかな」

「そうですね、一度ホテルに帰ってから向かいます」

「ああ、僕も汗をかいているし、シャワーを浴びてから行くよ」

玲奈が返事をする、テツは爽やかな笑顔を見せた。そしてすぐに「また後で」と言って、再びブルックリン橋の方に走り去っていく。

地下鉄に乗る玲奈は、彼の後ろ姿をいつまでも眺めていた。

ホテルに戻ると、テツの前で泣いたこともあり落ち着きを取り戻していた。時計を見れば約束の時刻までまだしばらくある。

玲奈は決着をつけようと短く息を吐くと、スマートフォンを持って館内に電話をかけた。

何度目かのコールでようやく電話に出た館内は、悪びれている様子は全くなかった。「連、あれは殆ど私の書いた記事だよね。どうして盗むようなことをしたの？」

「どうしてって、お前の名前だと雑誌に取り上げてもらえないからだよ。中身はよかつたからさ、俺の伝手で載せてもらった。大丈夫だ、担当にはお前が下書きしたことは伝えてあるから、次は玲奈の名前の記事になるさ」

館内の言うことなど当てにならない。記事の評判がよかったなら、本当のことを編集者に知らせてほしい。

そうして彼を問い詰めると――

「お前が一人前のライターとしてやっていけるわけないだろ？ 下手くそなお前は俺の下にいればいいんだよ」

あまりにも一方的な物言いをする館内の声を聞いて、玲奈は思わず叫んでしまう。

「そんなことないわ！ 私だって一人前のライターになれるわよ！」

「はっ、お前みたいな甘ちゃんが通用する世界じゃない。バカなこと言うな」

「そんなっ」

これまで励ましてくれていた館内の変わりように、玲奈は心を刃物で引き裂かれたように酷く傷ついた。

もう館内の顔を見るのも嫌だと思い、電話を切った後で怒りのままにメッセージを送

りつける。

『今日で連の本性がよくわかりました。――さようなら』

あんなバカでクズな男に捕まっている暇はない。仕事で一人前になって館内を見返そうと、玲奈は拳をギュッと握りしめた。

ニューヨークのソーホー地区にあるバーに入った玲奈は、カウンターに立つとメニューボードを見てオーダーした。

「モヒートをつつ」

すぐに渡されたロンググラスのカクテルには、半月切りされたライムが入っている。

さっぱりしたライムとミントの入ったラムベースのお酒を、玲奈はぐいっと喉に流し込んだ。

「んーっ、やっぱりモヒートは最高！」

学生の頃は背伸びをしてバーに行っていた。そんな玲奈も二十五歳になってそれなりの社会人経験を積むと、こうして臆せず一人でも来ることができる。

モヒートの爽やかな喉越しに気分がよくなった玲奈は、二杯目をオーダーしたところで入口の方を見る。

けれど、まだテツらしき男性を見かけない。どうしたのだろう、と思ったところで背

の高い男性が隣に立った。

『マスター、冷えたビールを頂戴』

ブリテイッシュ・イングリッシュを話す低い声は、待ちわびていた彼のものだ。嬉しくなった玲奈は頬を染めて顔を彼の方に向けた。

「テツさん！」

昼間と違い、彼はジーンズにパリッとした黒のシャツに着替えていた。シャワーを浴びたままなのか、髪の毛は乾かしてあるだけだ。

「レナさん、ごめん。待たせちゃったかな」

テツは受け取ったジョッキを持って近寄ってくる。すると、ふわりと爽やかなベルガモットの香りがした。

「いえ、私も今来たところですよ」

「帰りの地下鉄は大丈夫だった？」

目が合った瞬間に彼は、いかにも会うことができて嬉しいとばかりに破顔する。テツは無造作におろしている髪をかき上げると、玲奈の瞳を覗き込んできた。

「あれから、泣いてないよね」

柔らかな声は、まるで玲奈の背中を撫でるようだ。思わず胸がトクリと高鳴る。よかつたらこっちで話そうか、とグラスを持ってテーブルの方へ行く。

薄暗い店の中で会う彼は、明るい日差しの下で走っていた時と違い、野性味のある大人の色気を放っていた。

——まるで、黒豹みたい。

「モヒートが好きなの？」

「はい、爽やかで夏って感じがするの」

玲奈も白いノースリーブのトップスに、紫の大柄の花が描かれた黒いフレアスカートに着替えていた。高めのヒールの靴に大振りのネックレスをつけた姿は、さっきまでの清楚なワンピース姿とは違って大人びている。

胸元が大胆に開き、ボリウムのある谷間がチラリと見える服を選んでいった。テツを誘惑しようと思ったわけではないけれど、ちょっとは女らしさを感じてほしかった。

「レナさんはいつまでニューヨークにいるの？」

「もう殆ど仕事は終わったから、後は用事を済ませるだけです」

「そうなんだ、僕もあと少しだけ終わらなくてね、早く日本に帰国したいよ」

二人の話は盛り上がり、空になったグラスの代わりに喉越しのいいカクテルをオーダーすると、テツも二杯目のビールを頼む。

酔いもちょうどよく回ってきたところで、テツがため息をつきながら話し始めた。

「相手がタフでね、骨が折れるよ。こう見えても交渉には自信があったんだけどな。……」

真面目すぎるのかな」

「そうなの？ そんな風には見えなそうですよ？」

「堅すぎて、時々自分の性格をどうにかしたいなって思うけどね」

「だったら、大胆なことをしてみるとか？ 普段自分がしないことをしてみると、堅さも取れるかも？」

テツは一瞬言葉を失くし、次第に熱っぽい目で玲奈を見つめた。

視線を感じた途端に身体の奥の方がキュンと疼く。玲奈はグラスに残っていたカクテルをぐつと飲み干した。

「レナさん。君って本当に……第一印象と性格が違うって言われない？」

「そうなんです！ 大抵の人は私がお淑やかな大和なでしこに見えるみたい」

「はは、僕も最初はそう思ったよ。でも」

「でも？」

「ピザを大口を開けて食べる姿を見て、それは幻だったなって」

「なっ、そんな姿思い出さないでください！」

テツはくつくつと機嫌よく笑うと、レナに蕩けるような目を向けた。

「泣いている姿は可憐で、食べている時は素直で、……今は大胆で凄く魅力的だ。一日でこれほど翻弄されるなんて思わなかった」

「そんなこと言っても……な、何も出ないですよ」

手元にある空のグラスを見つめていると、顔に熱が集まってくる。テツの言葉にくりとしながらも、旅先の夏の夜が玲奈の気持ち大きくしていた。

バーの店内に南米のリズムの陽気な曲が流れ始め、フロアには踊り出す人が出てくる。サルサダンスの時間になっていた。

「テツさん、ダンスタイムが始まったけど、サルサは知っていますか？」

「サルサ？ 踊ったことはないけど」

「そう？ だったら教えるから、踊りましょう！ 意外と簡単ですよ」

サルサダンスは、簡単なステップで相手と向き合って前後に踊れば、それなりに形になる。周囲を見ても、皆陽気に踊っているだけでステップは二の次だ。

玲奈はテツの手をとると、ホールの方へ引っ張っていった。彼は戸惑いながらも、好奇心に満ちた目をして玲奈の後をついてくる。

触れている手から、テツの熱が伝わってくる。踊る人たちの中に入ると、玲奈はくりと向きを変えて彼と向き合った。

「まずはサルサから！ 大胆になってみようよ」

「そうだね、何事もチャレンジだ」

音楽に合わせるように、前に後ろに下がるステップを教えると、勘のいいテツはすぐ

に習得した。テンポを掴むと、周囲と同様に腰をしなやかに動かし始める。ステップを確認した二人は見つめ合いながら、身体を使って踊った。玲奈のフレアスカートの裾が踊りに合わせて揺れると、脚につけていた柑橘系の香水もふわりと香る。

「初めてにしては、上手ですよ！」

「ははっ、面白いね。癖になりそうだ」

「うん、これで少しは柔らかくなると思いますよ」

「君の方は、大胆すぎると言われない？」

「そうですね？ サルサは南米に行った時に、教わっただけです？」

曲に合わせくりと回ると、ふらりと足元が揺れた。

どうやら酔い過ぎたのかもしれないと足を止め、テツに目配せをしてカウンターに戻っていく。すると、ペアがいなくなったテツに目をつけた女性たちが一緒に踊ろうと誘っている。

サルサダンスでは誘い合うのがお馴染みだが、テツは彼女たちの手をとることなく玲奈のところに戻ってきた。

「あら、踊ってきたらいいのに」

「ははっ、つれないな。君とだから踊りたかったのに」

テツのストレートな言葉を聞いて、トクリと胸がときめく。

橋の上で助けてもらった時は真面目な人だと思ったのに、浮いた言葉を聞くと女の人に慣れているようだ。

クズ男だった元カレに騙されたばかりだから、余計に軽い男性には近づきたくないし、恋愛なんてしたくとも思えない。

テツはスマートで魅力的だが、やっぱり旅先で出会った男性に過ぎない。

玲奈は喉の渇きを覚えて辺りを見回すと、気がついたテツが水をもらってくるよ、とその場を離れていった。

——テツさんは素敵だけど……これ以上近づかない方がいいのかな。

玲奈が一人になった途端、今度は彼女を誘おうと男性が近寄ってくる。

そんな気分じゃないから、と手を振ってもしつこく迫ってきた。

『今日はツレがいるから、相手はいらないの』

『そんなこと言わないで、俺たちとあっちで飲もうよ』

『必要ないわ』

断っているのに、執拗に誘ってくる。すると男の手が伸びてきて、玲奈の手首を掴んだ。

『嫌っ！』

触れられたところからゾワリと嫌な感觸が流れてくる。どうしようもなく気持ち悪い。

男は玲奈の拒絶に少し怯み、手を離してチツと舌打ちをした。体格のいい男に睨まれ、どうしよう、と思った玲奈が振り返ると、テツが顔色を変えて戻ってくる。

テツはすぐに玲奈の隣に立つと、腰に手を回して身体を添わせながら、鋭い視線で男を睨みつつ低い声を出した。

『俺の女に手を出すな』

テツの姿を見た男性は、肩を竦めると諦めたのかすぐにその場を離れていった。玲奈が何度断ってもダメだったのに、テツの放った鋭い一言で去っていく。

「ああ、ありがとう」

ホツと安堵の息を吐くと、テツも「間に合ってよかった」と眉尻を下げた。けれど手はそのまま玲奈の身体に巻きついていてる。

「まあ、君が魅力的だっていうのもあるけど、日本人のノーマルはわかりにくいからね」

「普段なら、もっと上手に断るんだけど」

「君は案外、自分のことをわかっていない。僕があれだけ言ったからすぐに引いたんだよ」

「私のこと、テツさんの彼女って言ったこと？」

「ん？ まあね。……でも、本当にしたいんだけど。どうかな？」

バーの薄暗い照明に照らされたテツの目が、まるで獲物を見つけた野生の動物のよう

に光っている。腰に回している手にぐっと力を入れたテツは、至近距離で玲奈に甘えるように囁いた。

「レナさん、今日一日一緒にいて、君のことをもっと知りたくなった。よかったら、これから会ってくれないかな」

一瞬、ゾクリとした何かが背中を走る。

けれど、それには気がつかない振りをして、玲奈は自分に絡むテツの手をそっと押しのけると、少し距離をとって彼の目を覗き込む。

「テツさんって意外と大胆ですね。この調子で仕事をすれば、うまくいきますよ」

彼に惹かれる気持ちはあるけれど、今は館内と別れたばかりだ。

とてもすぐに次の男性、と気持ちを切り替えられるほど器用ではない。

今夜、気分よくお酒を飲めれば、それでいいかと思っていたけれど――

玲奈はかばんに入れていたスマートフォンが揺れていることに気がついた。今の時間であれば、日本は平日の午前中になる。

なんだろう、もしかしたら仕事の連絡かもしれないとそっとメールを確認した。

――ええっ、どうしてっ？

画面を見た玲奈は一気に凍り付いてしまう。桃色に染まっていた頬は血の気を失い、青白くなっていた。

「レナさん? ……どうした?」

テツが声をかけてきたけれど、玲奈はすぐに返事ができない。

それは内諾していた雑誌の特集記事のライター変更の知らせだった。麻生玲奈から、館内連への変更だ。

また胸がツキンと痛くなり、目が潤んでしまう。

——いけない、また泣いちゃう。

誤魔化すように瞼に指をあて、ちよつとだけ俯く。それでも涙が出てきてしまう。このままではまた、テツの前で酷い顔を晒しそうだ。

「ごめんなさい、ちよつと……」

どこか泣けるところに行こうと顔を上げると、彼は眉根を寄せた心配そうな顔をして玲奈を見つめていた。

「ごめん、僕が……余計なことを言ってしまったかな」

「いえ、そうじゃなくて、メールを見たら涙が勝手に出ちゃっただけで……」

涙腺が緩くなっている、普段はこんなに泣き虫ではないのに。

するとテツは腕を伸ばして玲奈を引き寄せ、気がつくとその胸に頭をつけるようにして抱きしめられていた。

——えっ。

目の前がテツの広い胸でいっぱいになっている。

背中に回された腕は遠慮がちに添えられていて、抜け出そうとすればすぐにできる。

突き飛ばすこともできる自由を玲奈に与えながら、それでもテツはゆるりと彼女を囲んでいた。

「泣きたい時は、泣いた方がいい。僕は……壁になるからさ」

壁にしては温かくて、胸がいっぱいになる。

すぐに悲しい気持ちが入り込んで、玲奈は鼻をすすりながら再び泣いてしまった。

「……っ、うつ、……ご、ごめんなさい」

「壁だから、気にしないよ」

テツの低い声が、玲奈の心を優しく震わせた。どうして彼には心の深いところを見せられるのだろう。

テツの長く力強い腕が玲奈の背中で組まれ、二人の距離は限りなく近くなった。

まるで心まで彼の腕に囲まれているようで、玲奈は肩を震わせた。

「レナ……言いたくないならいいけど、……また、あの男のこと?」

玲奈はこくと頷いた。

そのまま彼の胸の中で、玲奈はしゃくり上げつつポツリ、ポツリと説明する。

仕事を一つ失っただけではなく、館内が玲奈についてよくない噂を流したから、急に

変更になったのかもしれないことを。

「そんな……バカな。編集もそんな噂話を信じて、一度オファーした仕事を変更するのか？」

「わからないけど、こんなに急に切られるなんて、本当に……っ、もう、どうしたらいいの？」
 どうしようもなく涙が溢れてくる。

これまでの頑張りを否定されたようで、玲奈は苦しくなる胸のうちを吐き出すみたい
 に、テツの胸に顔を埋めた。

「レナ、ここだと落ち着かないだろうから……場所を変えようか。僕の部屋でいい？」

テツの柔らかない声を聞いた玲奈は、再びコクンと頷いた。この温かい腕の中にもっと
 いたい。それしか考えられなかった。

テツの固く大きな手をとると、彼は目元を少し赤くして「ホテルはすぐそこなんだ」
 と耳元で囁いた。玲奈は酔った足取りで、導かれるままに彼のあとをついていく。

テツの泊まるラグジュアリーで近代的なホテルに着いてドアを閉めた途端、待ちきれ
 ないとばかりに玲奈は彼の顔を両手で挟み込み、唇を寄せた。

——私を癒してほしい。冷えた心を、温めてほしい。

「お願い……テツさん、今夜は離さないで」

「レナ、でも……本当にいいのか？」

戸惑うテツの口を塞ぐように、玲奈は大胆にキスをした。

——誰でもいいから、私を乱して。あの男を、忘れさせて。

衝動的になった玲奈は、テツの首の後ろに手を回すと上目遣いで彼を見上げる。

「もう、忘れたいの。——何もかも。だからお願い、私をぐちゃぐちゃにして」

「……っ、わかった。クズ男なんて、すぐに忘れさせるよ」

低い声と共に大きな手のひらが頭の後ろに添えられ、逃れられなくなった。目を閉じ
 ると唇の上に柔らかなテツの唇が落ちてくる。

「でも、君を離せなくなるよ。それでも、いい？」

二度、三度と角度を変えて唇の端に口づけされ、視線を交わす。玲奈はゆっくりと目
 を閉じて頷いた。

言葉を発することもなく、唇の内側の湿ったところを重ね合う。息もできないほどに
 熱く口づけを交わしながら、テツは玲奈のブラウスの前ボタンを外していく。

もどかしいくらいに丁寧を外されて、前がはだける。すると花柄の飾りのついたブラ
 が現れた。

「可愛い。これ……外しても？」

こうなることを全く考えていなかったわけではない。持っている中で一番上品に見え
 る下着を選んでいた。

テツは背中に手を回してブラのホックを外すと、ゆっくりと上に押し上げた。締めつけから逃れることのできた乳房がたぶん揺れて姿を現す。

その瞬間、テツの雰囲気が変わる。雄の目をしたテツが、玲奈の目を覗き込んだ。

「レナ……凄く綺麗だ」

扉のすぐ近くの壁に背を押し付け、両手で乳房をすくいながら硬い手のひらで柔らかい乳房を揉み始める。上向きになって、硬く勃起した乳首をきゅっと強く指でつままれた。

息もできないくらいに舌を絡め合うキスをしたまま胸を刺激されると、下半身が疼き、身体が甘く反応する。

——テツさんって、凄い、上手……！

あんなにも紳士で大人な彼の手つきが、いやらしくて気持ちがいい。

獣のような熱いまなざしを受けながらテツに身体を預けると、玲奈の口からはしたないくらいに嬌声が漏れ始める。

「レナ、僕の目を見て」

「んっ、……ふっ、ううっ」

——これ、溶けるほど気持ちいい……

キスだけで腰にくるなんて、初めてだった。男の舌で囀られて、くちゅりと水音が耳

に響く。すると脚がぶるぶると震えてしまう。

テツは片手で乳房をまさぐりつつ、もう片方の手を伸ばしてスカートの上から玲奈の形のよい臀部を撫でまわした。

はだけた胸の突起に吸い付かれると、それだけで疼きが全身を走っていく。

——やだっ、これ、絶対に濡れてるっ。

脚の間からは滴る感触があった。たったこれだけの愛撫で、これまで経験したことのない夜になりそうだと玲奈は慄いた。

テツは柔らかいお尻から手を離すと、キスをしながら自分のジーンズのベルトをかちやりと外し、もどかしげに前をくつろげる。既に彼の欲望は布地を押し上げていた。

玲奈が手を伸ばして硬い部分をそろりと撫でると、テツはふるりと小さく震えた。

「……君はいけない人だ」

はあ、と熱い息を吐いたテツが耳元で囁いた。その低い声だけでゾクリとした快感が背中を走っていく。

テツは腰を落とすと昂りを玲奈の太腿にぐりぐりと押し当てるように身体をくつ付けた。

もつと、淫らなところにそれが欲しい。

そんな渴望が湧き上がってきた玲奈は、テツの黒いシャツのボタンを一つ一つ外しな

がら、ねだるように濡れた声を出した。

「ここじゃいや、……ベッドに、行きたい」

「わかった」

テツは逃がさないとばかりに玲奈の腰に手を回し、寝室に連れていく。

淡い光だけが残るように照明を落とすと、テツはそれまでの早急な手つきとは打って変わって、ゆっくりと玲奈をベッドに横たわらせた。真新しい白いシャツが肌に冷たい。

「自分で脱ぐ？ それとも……脱がせてほしい？」

「じ、自分で脱ぐから」

誘っておきながら、いざ身体をさらけ出そうとすると恥ずかしさが上回る。ブラジャーはさつきから引つかかっているだけで意味をなしてない。

既に露わあらになっている胸を腕で隠しつつ、玲奈はブラウスを脱ぐとすぐに、ブラの肩紐を外していく。フレアスカートのジッパーを下ろしてテツを見ると、まるで視姦するかのよう玲奈を見つめていた。

「もうっ、そんなに见ないで」

「やっぱりここから先は、僕にさせて」

巨元を柔らかく細めたテツが、ゆっくりとスカートを足から外していく。白く、少し肉付きのよい太腿と黒いレースのついた下着が露わあらになった。

「綺麗だ、レナ」

身体に残っているのはショーツだけだ。トクトクと高鳴る鼓動がさつきからうるさいくらいに耳の奥で響いている。

「私も、テツさんの服を脱がせたい」

口をすぼめて言うのと、彼はくすりと笑って「いいよ」と返事をした。

玲奈はベッドの上に立ち膝になり、さつき外せなくて中途半端になっているシャツに手を伸ばし、ボタンを最後まで外していく。すると、両胸がテツの目の前でぷるんと揺れてしまった。

ちよつと意地悪な顔をしたテツは手を伸ばすと、玲奈の乳房の先端をいじり始める。

「可愛い」

「ちよつと、これじゃ脱がせられないっ」

悪戯いたずらする手をかわしながら、なんとかシャツを脱がせ終えた玲奈はジーンズに手をかけた。盛り上がった昂りたかまりを見ないようにして硬いジーンズを腰まで下ろし、あとは片方ずつ外していく。

テツも服を脱ぎ終えると、黒のボクサーパンツ一枚になっていた。

休日に鍛えていると言った通り、細身の身体には均整のとれた筋肉が浮き上がっている。彼の身体から目が離せない。

ベルガモットの香りと仄かな汗の匂いが混ざり、目元を赤くしたテツから壮絶な色気が漂ってくる。玲奈を落ち着かなくさせる香りが鼻腔をくすぐった。

これから本格的に食べられてしまうのだろう、薄い唇を厚い舌でペロリと舐めた彼は、玲奈を視線で射貫いた。

「ああ、これも僕が脱がせていい?」

コクンと頷いた途端、テツはショーツの両端を持つと、少しずつ引き下ろしていく。するとささやかな和毛が現れて、蜜口からは恥ずかしい糸が伸びていた。

「可愛い、もう濡れてる」

「もうっ、いちいち口にしないで」

「ごめん、でも本当に可愛いよ」

テツはゆっくりと覆い被さると肌と肌を合わせるように抱きしめながら、顔中につきばむようなキスを落とす。

「レナッ、……レナ」

まるで恋人のように甘く名前を囁かれて口づけを受けていると、テツに愛されていると誤解しそうになる。

「っ、んっ、……ふあっ、ああっ」

「レナ、たまらないよ。もっと乱れて、僕に蕩けた顔を見せて」

テツの目の奥に、欲望の火が灯っている。

自分から仕掛けたはずが、さつきからテツにリードされている。キスをしながら胸に強めに愛撫され、痛いはずなのにもの凄く気持ちがいい。

じわりと愛蜜が滴り濡れていく。

—— こんなのため、溶けちゃうっ……

気がついた時には、テツは玲奈の下腹部に顔を落とし、ぶくりと膨らんだ蕾を口の中で転がしつ指をたっぷりと濡れた膣内に入れていた。

じゅぶ、じゅぶとゆっくりと解しながら蕾の裏側を刺激されると、玲奈はそれだけで快感を拾ってしまう。

「もっと、声を出して」

次第に指の数を増やして抽送を繰り返されると、気持ちのいい感覚が這い上がってくる。太腿の内側に力を入れ、脚を閉じようとしてもテツの身体が入り込んでいてできない。「んっ」

ぞくぞくっと快感が背中を走っていく。舌先で蕾を捏ねるように吸われつつ蜜口の気持ちのいいところを刺激されると、突然、その感覚が玲奈を襲った。

「っ、はあっ、ああっ——っ」

びくん、びくんと身体が跳ね、太腿でテツの頭を挟んでしまう。

「あつ、ああつ、イ、イッちゃう……」

快感が全身を貫いていく。いきなり絶頂を味わった玲奈は、信じられない思いでテツを見るけれど、彼は「まだだよ」と言いながら再び蜜口に口づけた。

「まだっ、まだイッてる、からっ」

さらに深く指を突き入れられ、蕾に強く吸い付かれるとダメだった。

「あつ、……ああつ、あつ、あつ、もう、いっ」

痙攣が収まらないまま連続して刺激され、再び絶頂に持っていられる。玲奈は立て続けに達していた。

震える腰を突き出すようにして、きゅうっとテツの指を締め付ける。何度もダメといってもテツは舌を器用に動かして、敏感になった蕾を刺激することをやめなかった。

——こんなに激しいなんて、聞いてないっ！

シーツを驚掴みにしながら全身に力を入れて足先をピンと伸ばす。背中をビクツとのけ反らせ、玲奈は再び絶頂へと投げ込まれていた。

——こんなに、気持ちいいなんて……

酔った上に今日初めて出会った人とワンナイトなんて、これまでしたことがない。玲奈は大胆なようでいて、館内が初めての相手ですつと彼に一途だった。

館内とは比べ物にならないほどに高められている。

立ち読みサンプル はここまで

テツは起き上がると愛液で濡れた口元を腕で乱暴に拭う。その仕草がまた、胸をキュンと締めつける。

玲奈は両手を上げるとテツの頭を抱えるようにして、再び自分から唇を合わせた。

キスの合間に何度も「可愛い」と囁かれると気持ちがいい。

きつと今夜だけの関係なのに、テツの低音で聞くと心の一番奥に届くようで、震えてしまう。

互いの口内の柔らかいところを舐め合って舌を絡めながら、テツの骨太の指で花芽を捏ねられ、花びらをなぞられる。

腕を伸ばしてテツの昂りに触れると、彼は下着を下ろして窮屈な場所からそれを取り出した。血管がビキビキと浮かび上がり、硬く勃起し上がっている。

雄茎を手を持ったテツが濡れた鈴口を秘裂に添え、入口を往復するように擦る。それだけで玲奈は小刻みに達していた。

「ああ、もういいかな。レナ、……挿れるよ」

ぐっと両膝を開かれ、テツが待ちきれないとばかりに腰をあてがう。

「はあ、ちよっと、待って」

顔を少し上げて彼の熱杭を直視すると、想像以上に逞しい。テツのそれは背の高さに比例するように大きかった。